

4 下呂市小坂町地域の民話

小坂町には御岳の溶岩と水がつくる多くの滝がある。これらの滝を流れる水が、いくつもの河川を形成する。巖立峡（がんだてきょう）を流れる樫谷（さわらだに）と湯屋地域の大洞川が合流する落合地域に伝わる話が「鬼退治地蔵」である。落合で合流した小坂川が流れる赤沼田（あかんだ）に残る話が「釜ヶ淵」であり、益田川との合流地点にある橋にまつわる話が「朝六橋」である。

小坂町から益田川は萩原地域に南下し、大島谷を流れる水を合わせるが、大島谷に関する不思議な話が「がたがた橋」である。また、萩原町宮田から仁王像が上流の小坂町に遡っていったという話が「力持ち小太郎」である。

（4－1）鬼退治地蔵

①話の内容

落合の村人たちは年々百姓仕事に精をだし、豊年の秋を迎えようとしたある年のこと、毎夜白鬼があらわれて、村中の稲を食い荒らしてしまった。村人たちが悲嘆にくれているところへ、ひとりの旅僧があらわれ、村人からこの話を聞くと、

「それは気の毒なことじゃ、わしが仏の力で二度と鬼のあらわれぬようにしてやる」と村人をなぐさめ、その日からコツコツとノミを振るい、経文を口ずさみながら地蔵菩薩を刻みあげた。旅僧は、これを鬼の出入りするという岩穴に安置し、村を去った。

不思議やその夜から鬼は姿を現さなくなると、村には以前のような平和が戻ってきた。村人はこの地蔵を鬼退治地蔵とあがめて大切に守った。（『岐阜県小坂町誌 全』）

③取材調査

小坂町落合地区に鬼退治地蔵がある。当初は木像だったようだが、朽ちてきたため現在は石像に改められている。地蔵堂には多くの花が供えられており、現在も地域の方々から大切に守られていることがわかる。

「NPO法人飛騨小坂 200 滝」職員の熊崎淳さんから話を聞いた。

「地蔵様の奥にある穴から白鬼が出てきたという話だが、鬼はどこからやってきたのか。巖立峡の上に『桐の木穴』とよばれる穴があり、鬼はその穴を通過して落合に現れたと言われている。」

「鬼のすみかは御嶽山の溶岩流、とも言われている。」

③研究・考察

物語に登場する鬼が白鬼であることや、他の地域の民話に類似する話がみられないなど特徴的な話である。二つの穴の間を鬼が行き来していたという部分は溶岩地形の魅力を感じさせる。



鬼退治地蔵

（8月3日下呂市小坂町）

柱状節理地形の特徴を持つ巖立峡は御嶽山の溶岩の末端部にあたり、さまざまな滝を見学するための入口となっている。大きな岩山の上には深い「桐の木穴」がある。



巖立峡（左）の頂上付近にある「桐の木穴」（右）（2010年10月下呂市小坂町）

湯屋地域を流れる大洞川脇には、室町時代に湧出した冷泉（湯屋温泉）がある。炭酸含有量が高く、飲むと胃腸によいとされる。地域の数か所に飲泉場があるほか、炭酸を利用した粥（鉱泉粥）や湯豆腐が名物料理として提供されている。寒の入りから節分までに粥を食べるとよいという風習が残っており、毎年1月中旬に「寒粥祭り」が行われている。



湯屋温泉噴泉地跡
（2013年10月17日下呂市小坂町）



湯屋温泉飲泉場
（2013年10月17日下呂市小坂町）

(4-2) 釜ヶ淵

①話の内容

小坂町赤沼田、昔、大なる湖水あり。四方は大森林にて湖面暗く、物凄きものなりき。いつの頃か姉弟二人湖邊に居住せり。或年旱天打続き、田畑の作物皆枯れ、果ては湖水も涸るるばかりになりぬ。姉弟は何思ひけむ、炊事常用の釜をこの湖中に投じて居所不明となりしに、俄然大雨沛然として至り、人民始めて生色あり、釜は遂に湖底に沈みて化石となり今に存す。釜石と呼ぶる湖の跡は今は狭くなり林間の水絶えず注ぎ入るも全く出口なし。(『益田郡誌』ほか)

②取材調査

小坂赤沼田にある釜ヶ淵を訪ねた。川の流れの速い場所にあり、深い淵だった。かつてはもっと多くの水量があり、カヌー競技が盛んに行われていたそうだ。

近所に住んでいる、木一よしさんから話を伺った。

「私たちも小さい頃に、雨が降らん時に、あそこにお祈りをするといいという話を聞いた」
「昔は今よりも水の量が多かったもんで、とても危険な場所で、流された人も多かったと聞いている。私たちの小さい頃は近づかんほうがいいって言われた。だから私たち女は近づかなんだ。男の子たちはあそこで遊んどったけど。」



釜ヶ淵 (8月10日下呂市小坂町)



カヌー公園 (8月10日)

③研究・考察

雨乞いを滝で行う話が、小坂町滝上地域や大洞地域に残っている。滝上地域の話は、早魃に際して、観音様のお札を滝に投げ込んだところ雨が降ったという話である。また、大洞地域の話では、観音滝の観音様にお祈りをしたところ雨が降ったという話である。



滝上地域から見た益田川と小坂町大垣内 (7月19日下呂市小坂町)



滝上牧場(7月19日下呂市小坂町)



観音滝(7月19日下呂市小坂町)

雨乞いを山で行う地域もある。萩原町西上田地域にある権現山がその一つである。『益田郡誌』には、「古来旱天打続きたる際、此所にて雨を祈れば必ず其靈験ありとて、今に至るも時に之を行う」とある。現在は毎年7月下旬の行事として、地域住民が権現山に登り、頂上で山の安全と雨の恵みを祈る。今年も多くの地域の方々が登山と祈願をされた。

山に降る雨は、益田川に注ぐ石浦谷を潤す。谷の水を住民が交替で管理し、各戸の田や畑に引くことで、米や野菜が成長する。昔ながらの風習が現在に綿々と引き継がれている。



権現山登山(7月26日下呂市萩原町)



権現山での祈願(7月26日)



権現山での祈願(7月26日)



西上田権現(7月26日)

(4-3) 朝六 (あさむつ) 橋

①話の内容

昔、大坂に住むある金持ちが毎晩不思議な夢を見た。飛騨の小坂という村の釣橋の下を流れる川に、光る宝石があり、夜になると光り輝くという。欲張りな金持ちは宝石が欲しくなったので、番頭に探させることにした。番頭が小坂に着くと金持ちの夢の通りだった。夜に光り輝くというので、夜に川の中を探したが宝石は見つからなかった。しかし根気よく探していたので、村人の間でたいそう評判になった。村の善兵衛という男は、番頭が宝石を探しているといううわさを聞いた。そして家に伝わる宝石のにせものを作らせ、川に置いた。番頭はそれを見つけ大阪へ帰った。ある日、善兵衛は本物の宝石を見ようとしたが、宝石はいつものように光らなかった。それはにせものの宝石だった。善兵衛の家は年々貧しくなり、村にも住めなくなった。『ひだ小坂のむかし話』ほか)

②取材調査

小坂振興事務所職員の江原由佳さんと下呂市立小坂図書館職員の荒井順子さんから話を聞いた。「朝六橋」は、小坂川が益田川に合流する手前に架けられている橋で、川の輝きによって夜でも朝六つ（明け六つ）時のように明るく見えることからこの名が付けられているという。小坂の市街地と萩原をつなぐ橋で、現在も交通量が多く、大切な交通路だ。橋から見る小坂川の水はとても澄んでおり、話の通り、輝くようだった。

小坂川上流の湯屋地域から御嶽山に至る地域は古くから森林業で栄えた地で、かつて木材は小坂川を使って流され、朝六橋付近に集められた。昭和に入ると森林鉄道を使って運ばれるようになり、やがてトラックで運ばれるようになった。



アーチ型の朝六橋
(7月27日下呂市小坂町)



朝六橋から見た小坂川 (7月27日)

③研究・考察

『飛州志』によると、かつての「アサムツノ橋」は萩原町尾崎の「尾崎の渡」の場所にあったが、天正年間に飛騨国府に向かう本道が位山道から小坂に変わる中で、小坂の橋の方をアサムツノ橋と称するようになったと記されている。小坂・萩原のどちらにもそのことを記す碑があった。現在、萩原町の橋の名は「浅水橋 (あさんずばし)」となっており、歩行者と自転車が通ることができる。

明治6年創立の小坂小学校は平成24年度に湯屋小学校と合併し、新しい小坂小学校となった。合併前の校歌の歌詞にも、新しい校歌の歌詞にも「朝六橋」が歌われており、昔も今も地域の大切な橋であり続けていることがわかる。

小坂小学校校歌（合併前のもの）

ほのぼのと やみの夜さえ 朝六の 明けの光に まごうちょう
橋のほとりの水底に ひそめる玉の物語 （一番 作詞 福田夕咲）

小坂小学校校歌（合併後のもの）

水面きらめく朝六橋に 明るい笑顔弾む声
我ら 我ら 小坂っ子 元気な子
心と心を通わせて なかよくみんな学ぼうよ （一番 作詞 石井昭吉）



朝六橋碑（7月27日下呂市小坂町）



小坂図書館での取材
（7月27日下呂市小坂町）



浅水橋碑（7月27日下呂市萩原町）



浅水橋（7月27日下呂市萩原町）

(4-4) 力持ち小太郎

①話の内容

宮田の藤ヶ森に大きな寺がありました。そこには運慶が作ったという仁王様が二体安置されていました。ところが、戦のために、寺にも、仁王様にも火がついてしまいました。困った村の人们は、仁王様を川原に運ぶと益田川に流しました。すると、仁王様は不思議なことに上流に流れていきました。そうしてたどり着いたのが小坂でした。

小坂に住んでいる小太郎が大島橋場に出かけると、自分を呼ぶ声が聞こえます。淵を見ると黒こげになった仁王様が浮かんでいました。驚いた小太郎は、一人では無理だと思って引き返そうとすると、仁王様が言いました。

「小太郎や、早くわしを助けてくれ。観音様まで運んだらお前に倍の力を与えるぞ。」

小太郎が思い切って仁王様に手をかけると、不思議なことに軽々と持ち上げることができました。それから仁王様は観音堂に安置されることになり、小太郎はすばらしい力を授けられました。(『ひだ小坂のむかし話』)

②取材調査

仁王様のある長谷寺を訪ねた。実際の木像は、燃えてしまったからか、仁王像とはいい難い姿だった。寺には力持ちにちなんで大相撲の横綱が祈願に来たという資料も残っていた。なお、力持ち小太郎の話にちなんだ小太郎祭りが毎年8月に行われており、夏の一大イベントとなっている。



仁王像が奉納されている長谷寺
(7月27日下呂市小坂町)



長谷寺境内(7月27日下呂市小坂町)

久々野で力持ち庄助の子孫がいるという話を聞いたが、小坂町図書館の荒井さんから、小坂には「コタロウ」という屋号があり、力持ち小太郎の子孫がいるのではないか、という話を聞いた。現在は岐阜市に住んでいる細江敏之さん(56歳)がその方で、お盆で実家に帰省された際、話を聞いた。

「昔からこの家が『コタロウ』とよばれていたそうで、お寺の集まりなどで近所の方から伝え聞いた話では、細江家は元々近江の出身であるということくらい。詳しいことはわからないが、このあたりで屋号のある家は少ない。話が本当ならこの家から小太郎さんは大島に向かっていったことになる」

「祖父の名は仁太郎といい、背の大きい人だった。満州に開拓に行ったが、すぐ終戦になり帰ってきたそうだ。小太郎の資料も持っていたらしいが、満州で処分したらしい。」

「仁王様が流れてきたという朝六橋から益田川との合流地あたりは絶好の水遊び場所で、夏休みには毎日川に行って遊んでいた。私が高校を卒業した年のお盆に地域興しのために小太郎祭りが始まった。私は就職してしまったので参加したことはないけれど。」

細江さんの家の資料によると、細江家の先祖は近江国細江庄に居住し、浅井氏に仕え、その後、飛騨の三木氏に仕えた後、小坂郷に居住するようになった。その後八代目の普幸が細江小太郎であると記録されていた。

③研究・考察

『益田郡誌』によると仁王像は戦によって燃えたのではなく、安置しておいた観音堂が火災となった際に焼けてしまったと記されている。その後、半焼のものが残されたが、「火傷の霊薬なりとて削り取りて行く者」が絶えなかった。そのため、像の形も大きく変わった、と伝えている。また、萩原に伝わる話では、川に放り込まれた仁王様の助けの声を小太郎は夢の中で聞き、翌日お告げのあった場所で仁王像をみつけたことになっている。

細江さんの家のすぐ近くにある津島神社境内から南側に益田川と小坂川が合流する地点が見える。樵夫（きこり）大橋付近で、乗鞍から流れてきた益田川と、御岳から流れてきた小坂川の二つの河川が合流する。このあたりまで仁王様が流れてきたのだろう。



津島神社 (8月15日下呂市小坂町)



津島神社から南側をみる (8月15日)



益田川 (左) と小坂川 (右) との
合流地 (8月15日)



小太郎祭りでのこども神輿の行列
(8月15日)

(4-5) がたがた橋

①話の内容

小坂町大島の金右衛門なるものありて洞の口に居住せり。屋後に洞に上る道あり、又近所の谷に橋あり、夜な夜な怪異の橋をがたがたと音させ屋後の道を通ること年中絶えず、雨風の夜など殊更多く恐ろしき事限りなし、占者をして占はしむるに此道越中の立山に続く、立山には地獄あり、怪異と見しは亡者が通行するなりと、金右衛門恐ろしく思ひ遂に居を更へ、尚經塚を立てて亡者の冥福を祈れり、其後怪異もなく、がたがた橋も音もなくなりぬと、がたがた橋の名は今も伝はり經塚も残れり。(『益田郡誌』)



②取材調査

がたがた橋近くに住む中切時男さん(82歳)から話を伺った。中切さんは長年営林署に勤務し、この地域に長く住まれている。

「昭和40年代に営林署の関係でここに家を建て、住んでる。他に住むところもなかったしな。昔は木製の橋だったが、改修されて現在のようなコンクリート製になった。」

「昔話では、立山に続く道があるというが、この大島谷の上流にある山を越えていくとその道がつながると言われているそうだ。だから山のふもとにお堂を建てて祈願している。」



がたがた橋の聞き取り調査
(7月27日下呂市小坂町)



亡者が越えていったと伝えられる
「洞に上る道」(7月27日小坂町)

③研究・考察

物語に出てくる立山は、富士山、白山と並ぶ山岳信仰の山であり、中切さんが示してくれた方角も立山のある北だった。小坂町には霊山としてもっと身近で名高い御嶽山があるが、亡霊たちは遙か遠くの立山をめざしたのはなぜだろうか。地歴科の日比野恭一先生に聞いたところ、日本中の死者は立山の地獄に落ちるという思想があったという話を聞いた。古来思想のあらわれが、「がたがた橋」の物語を生んだのだろうか。



大島谷(7月27日下呂市小坂町)